

会

報

社団法人 日本病理学会
〒113-0033
東京都文京区本郷2-40-9
ニュー赤門ビル4F
TEL: 03-5684-6886
FAX: 03-5684-6936
E-mail jsp-admin@umin.ac.jp
http://jsp.umin.ac.jp/

社団法人日本病理学会

第259号

平成21年(2009年)8月刊

1. 次期役員選挙の実施について

日本病理学会選挙管理委員会は、6月20日、本学会正会員に次期役員立候補者の公募および選挙日程などの選挙概要を公示した結果、再公募による応募を含めてすべての選出区分で応募があった。

選挙管理委員会は、定員を超えた立候補者のあった全国区選出理事の選挙を実施することとし、8月20日に選挙管理委員長名で投票用紙のほか「被選挙人名簿」および「所信表明一覧」などを送付して、投票を依頼した。投票は平成21年9月9日(水)(当日消印有効)までである。

なお、その他の選出区分は、それぞれの立候補者数が定員内であり、「新役員当選者名簿」のとおり、無投票当選となった。

被選挙人名簿

全国区選出理事(選出区分2)

氏名	所属
青 笹 克 之	大阪大学医学系研究科病態病理学
江 澤 英 史	重粒子医科学センター病院
深 山 正 久	東京大学
福 本 学	東北大学加齢医学研究所
樋 野 興 夫	順天堂大学医学部病理・腫瘍学
覚 道 健 一	和歌山県立医科大学第2病理学
黒 田 誠	藤田保健衛生大学病理診断科
松 原 修	防衛医科大学校病態病理学講座
向 井 清	東京都済生会中央病院病理診断科
仲 野 徹	大阪大学医学系研究科病理学
根 本 則 道	日本大学医学部病理学
岡 田 保 典	慶應大学医学部病理学教室
笹 野 公 伸	東北大学病理診断学
高 橋 雅 英	名古屋大学医学系研究科分子病理
高 松 哲 郎	京都府立医科大学病理学
上 田 真 喜 子	大阪市立大学大学院病理病態学
安 井 弥	広島大学大学院分子病理学

以上 17名(記載はABC順, 所属は15字以内・本人申請)

所信表明一覧(I)

全国区選出理事候補者: 17名; 掲載はABC順

青 笹 克 之

(大阪大学医学系研究科病態病理学)

日本病理学会に課せられている主な使命は(1)病因・病態の解明を目指す病理学研究の進展, (2)病院で働く病理医の労働条件の改善を通して, 病理診断業務を一層魅力あるものとするための努力, (3)学生, 研修医の病理学教育の充実を通じて医学・医療の発展に寄与する人材を育成することにあると考えます。この三者の調和ある進展のなかに日本病理学会の将来の発展が展望されると考えております。何よりも病理学の魅力を高めることにより, 多くの人材をこの分野へ集めることが大切と考えています。私は日本病理学会の一員として, 又, 全国区あるいは地方区理事としてもこれらの課題に全力で取り組んで参りました。これまでに培った知識, 経験, そして人的交流を基盤として, 微力ながら日本病理学会の充実, 発展のために一層の貢献を行いたいと考えています。此度の理事選挙(全国区)への立候補にご理解をいただき, ご支援を賜われば幸いです。

江 澤 英 史

(重粒子医科学センター病院)

以下の三点に特化し活動したい。① 広報活動。病理医に対する社会認知度は低く, メディア取材で「病理士」と言われたりする。広報活動に携わり社会認知度を高めたい。② Ai(オートプシー・イメージング)の理解促進と社会導入推進。現在, 学会理事によるAiの公募班研究が行われているが, 病理専門外の画像診断であるAiの班研究を病理医が差配するのは学術的越権行為だ。おまけに班員のAiに対する理解が低く, その研究結果が社会認知されると病理学会発の医療崩壊が促進し, 市民社会に禍根を残すことになる。現理事会はAiを解剖補助検査と規定するが, するとAiに費用がつかず社会導入を阻害する。こうしたAiに対する誤った認識を是正する必要がある。③ 現理事最年少は五十歳。若手病理医や地方の声が理事会に反映されず, このままでは三年後, 現場の疲弊は増進し, 崩壊してしまう。社会構造の中で若手中心の新しい病理学会像を提唱したい。

深山 正久

(東京大学)

病理学会は2011年に100周年を迎えます。今回選出される理事は、「病理診断科」標榜科認可後の諸課題に積極的に対応すると共に、この節目を新たな出発点に病理学会発展の将来的な礎を築く、という責務を担います。これまで私は2期4年間、副理事長、企画委員長を務めました。この間、「若手医師確保に関する小委員会」の設置、「診断病理サマーフェスト：病理と臨床の対話」の企画と実施など、若手病理医のリクルートに取り組んできました。さらに、公益法人化への移行作業、100周年記念事業にも力を注いでいます。

引き続きこれらの課題に取り組み、最も重要な「人作り」を念頭に、若手病理医育成と生涯教育に尽力します。また、国民の医療に責任をもつ病理学、そして基礎と臨床をつなぐ学問領域の発展を目指します。このため基礎研究者と病理医をつなぐ交流の場を積極的に設けていきます。

皆様の御理解と御支援をよろしくお願い申し上げます。

福本 学

(東北大学加齢医学研究所)

私が医学部病理学教室から大学附置研病理へ異動して10年が経ちました。その間に附属病院が大学病院へ統合されたため、研究に軸足を置くこととなり、最近になり漸く体制を整えることができました。激変する環境の中で自分の立ち位置を見出したこの経験を、今後の病理学会の発展に役立てたいと思い、立候補しました。形態観察からその背景に思いを馳せるという本来の病理学を展開するためには高い質を維持しつつ専門医を増やすことが必要です。年齢、卒後経験を問わず、志の高い臨床医に対し門戸を開放し、同時に待遇改善を図る必要があります。例えば、病院勤務医に学位取得目的とした研究活動と併行して、病理専門医資格を取得する道を整備する。行政側との粘り強い交渉と、病理診断料ガイドライン作成により病理医の待遇改善を図る。標榜科実現、法人制度改革を機会に学会の定款・目的を患者・国民目線に変える、などを着実に実行したいと考えています。

樋野 興夫

(順天堂大学医学部病理・腫瘍学)

「診断病理学」と「実験病理学」とそれをブリッジするダイナミックな「広々とした病理学」は、時代の要請であると考えます。患者の視点に立った医療が求められる現代、病理学の在り方を静思し、高らかに世に示す時であると思います。「病理学」には限りがないことをよく知っていて、新しいことにも自分の知らないことにも謙虚で、常に前に向かって努力しているイメージです。(1) 世界の動向を見

極めつつ歴史を通して今を見ていく (2) 俯瞰的に病気の理を理解し「理念を持って現実に向かい、現実の中に理念」を問う人材の育成 (3) 複眼の思考を持ち、視野狭窄にならず、教養を深め、時代を読む「具眼の士」の種蒔き 病気の本態が遺伝子レベルで具体的に考えられるようになり、病理学にとってエキサイティングな時代の到来であるはず。「潜在的な需要の発掘」と「問題の設定」を提示し、「病理学に新鮮なインパクト」を与えることが使命と考えます。

覚道 健一

(和歌山県立医科大学第2病理学)

理事候補として所信を表明し、皆様の応援をお願いいたします。理事として学術委員、企画委員、教育委員会委員長として2期学会運営に参加しました。第52回秋期総会を和歌山で開催しました。病理学を将来性ある研究分野へ脱皮させるため分子遺伝学、細胞生物学など、学問領域を超えた新しい病理学の創造が必要です。医療全体の中での病理学を考えていかなければなりません。診療科としての病理学がもう一つの柱です。病理診断学の立場を確立し、専門医育成システム創りや、病理学会会員が共有できるモデル研修病院を創りたいと願っています。それには研修プログラムの充実や、専門医制度に若い世代の参加、意見の反映が必要です。また日本での専門医研修が海外でも認知される必要があります。アジア諸国との交流活性化と医療の国際化に努力したいと考えています。皆様のご支援をお願いいたします。

黒田 誠

(藤田保健衛生大学病理診断科)

私は現在、病理専門医制度運営委員長として“医療としての病理学”の実践と啓発活動に全力を挙げて取り組んでいます。高度先進医療における最終診断やセカンドオピニオン、あるいは医療関連死の問題等で国民が病理に対して今までになかった視点から注目をしてきております。また、昨年度は「病理診断科」の標榜が実現し、「病理診断」を第13部として独立させることもできました。これは病理学会にとって大きなチャンスと考えます。今こそ将来の病理学会のあり方を真剣に考えていくとともに医学生および研修医が“医療としての病理学”に魅力を感じる現場のあり方を検討し実践していかなければなりません。病理が医療に必要な不可欠な存在であることを世の中に幅広くアピールをし、国民に支持をしていただけるように尽力します。現在までの病理学会での多くの経験を基盤として全力でがんばっていく所存でございますので御支援の程何卒宜しくお願い申し上げます。

松原 修

(防衛医科大学校病態病理学講座)

(1) 身の丈に合った病理学会へ、(2) Subspeciality の集会を増やす、(3) 簡素で paperless の学会にを、2年前に掲げて当選させて頂き、理事2年間で国際交流、学術、企画委員を務めました。岡田副理事長のご尽力により Pathol Int の on-line 化で学会費の値下げが実現しそうです。病理専門医部会員の会費をなくし、病理専門医部会会計と一般会計を統合し、学会の基金約1億円の特別財産から新規事業資金を捻出することもできたらと考えます。国際交流面では日英、日独、アジアとの交流がしっかりとした3本柱となる様に努力します。変動激しい医療・社会の中にあつて、病理学会も新公益法人への移行、後継者育成と病理医人口増加、社会に開かれた学会、広く国際交流といった問題に速やかに対処し、時代に取り残されることなく一つずつ解決していかなくてははいけないと考えています。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

向井 清

(東京都済生会中央病院病理診断科)

病理医を取り巻く環境は相変わらず厳しいものがあります。標榜科は実現しましたが、人手不足や厳しい労働環境の改善には結びついておりません。2年前に役員選挙制度の改革を訴えてご支援をいただき理事として活動してきました。しかし具体的な案の作成にはまだ至っておりません。公益法人化に合わせて選挙制度を含め、改革を行うことが今後の病理学会の発展には必須です。自薦による立候補者のみならず、他薦にて学会に尽くしていただきたい方を選ぶ方法も必要です。2年という役員の任期も事業の継続性という点からは不適當です。学会は若い病理医が増えるよう努力してきましたが、病理専門医は実働1,600人ほど増えていません。現状を打破するためには、学会が一丸となって多くの課題に取り組んでいく必要があります。広く人材を求めめるためにも選挙制度の改革は必須です。2年前のお約束を守るためにもう1期の任期をお与えいただく様お願い申し上げます。

仲野 徹

(大阪大学医学系研究科病理学)

病理学とは、疾患の原因・病因を探る統合的な学問分野であり、形態学を基盤として、分子生物学をはじめとする他分野の先進的成果を総動員して取り組んでいかなければならない。すべての医学部生は、病態を正しく理解できる医師になるため、最先端の学問分野としての病理学を身につけなければならない。私は、病理診断には従事していませんが、大阪大学医学系研究科・病理学の教授に就任してからの5年間、このような考えに基づき、教育および研

究に勉めてまいりました。病理学の重要性和魅力を広く発信するとともに次の世代に伝え、さらに発展させていくことが、病理学教室に籍を置く私に課された何よりの責務であると考え、非力ではありますが、日本病理学会のために力を尽くすことができればと、思いを定めるにいたしました。何卒、ご理解をいただき、このたびの理事選挙(全国区)への立候補につきまして、ご支援を賜われれば幸甚に存じます。

根本 則道

(日本大学医学部病理学)

日本病理学会は創立100周年を目前にして、かつて経験したことがない程の大きな転機を迎えています。平成20年4月の医療法改正による標榜診療科としての病理診断科の誕生と診療報酬改正における第13部病理診断の独立は、病理診断科の開業を可能とし病理医の社会的認知の上で大きな弾みとなりました。一方、現行の診療報酬表におけるドクターズフィーに相当する病理診断料の算定には様々な制約があり、医療現場における病理診断の実情と大きく乖離すると共に、多くの問題点が指摘されています。そして、この点がわが国の病理診断医の育成に大きな障害となっていることも事実です。私は医療業務委員長として社会保険委員会と共にこの問題点に真剣に取り組んできました。今後もわが国の将来を担う医師が進んで病理医を一つの職業選択として目指せるような医療環境を整備することに誠心誠意努める所存です。会員の皆様の力強いご支援をお願い申し上げます。

岡田 保典

(慶應大学医学部病理学教室)

診断病理学と実験病理学の一方に偏ることなく、両者がバランスよく運営されることが日本病理学会にとって最も肝要と信じております。このような観点から、「実験的事実に裏打ちされた診断病理学」と「ヒト疾患の診断・治療に結びつく実験病理学」が表裏一体となった情報を提供する学会を目指して、これまで学術担当の常任理事・副理事長として、学術集会の改革、Pathology International の on-line 化、市民公開講座の改善、などに取り組んできました。今後は、年会費値下げの実現、次代を担う若手病理医・病理学者の発掘、新たな病理医・病理研究者の獲得・育成が重要課題と考えています。これらの課題達成に向けて、学部・大学院生や研修医に魅力と期待を抱かせる病理学を提示するとともに、日本病理学会のさらなる活性化・充実を目指して努力したいと考えております。病理学会員の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

笹野 公伸

(東北大学病理診断学)

多くの日本病理学会の諸先輩方のご尽力で病理診断科が標榜科とはなりました。しかしこれから病理診断を志す後継者をより多く本邦で輩出していくにはまだまだやる事が多く残されております。すなわち米国などで行なわれていますように病理医が直接患者に診断料他を請求出来る方向性を確立するなど、名目/書類上だけではなく実質的に病理医が独立した標榜科としてやっていける地位を築いていける筋道をつけるのが現時点で未来の病理診断医に対して我々が出来る一番の事ではないかと思っております。この為には我々自身が患者の正確な病理診断を下す為に日々病理診断の研鑽を積んで行く事が何よりも重要であり、学会としても出来るだけ多くの卒後教育の機会を設けていく方向を第一に考えたいと考えます。更に外保連、内保連などの場を含め病理診断科/診断医の地位を更に向上させる方向で日本病理学会が全力で取り組む事も提案してまいります。

高橋 雅英

(名古屋大学医学系研究科分子病理)

この度、日本病理学会理事選挙に立候補するにあたり、所信を表明させていただきます。

私は2006年4月より向井清先生の後を受け継ぎ、Pathology Internationalの編集長に就任いたしました。この間、日本病理学会の英文機関誌としての質の向上に努め、宿題報告担当者(日本病理学会賞受賞者)のReview Articleの執筆や採択論文のweb siteへの迅速な出版を行ってきました。その結果、2007年、2008年度のインパクトファクターを1.3台にまで上げることができました。2010年度からはPathology Internationalは完全on line化になります。英文機関誌はその学会の研究活動のレベルを反映する鏡でもありますので、on line化以降もさらにその質の向上と迅速な出版に努めていきたいと考えています。また学会員の多様な意見、成果を学会の学術活動に反映できる取り組みを推進していきたいと思っております。特に形態学を基盤とするヒトの疾患の病態解明は病理学会が中心となるべきであり、その存在感をアピールできるように努力いたします。

高松 哲郎

(京都府立医科大学病理学)

私は小児科を学んだ後病理学に取り組み、多くの先輩や同僚に支えられて教育・研究・診療について多くのことを学んできました。研究では独自で開発したイメージング技術を用いて新しい心臓病の考え方を病理学に持ち込むことに取り組み2007年宿題報告を担当させていただきました。これまで日本病理学会は私の仕事を支えてくれたもっとも大きな組織ですが、今度はこれまでの経験

を生かして同僚や後輩の支えになればと考えて立候補しました。私の研究キャリアは医学部以外の分野の方々との交流から始まりましたが、懐の深い病理学会には医学だけではなく医学以外の分野との人的交流は是非行うべき重要なものであり、経験を生かした貢献ができればと考えております。

上田真喜子

(大阪市立大学大学院病理病態学)

私は現在、日本病理学会の理事および人材育成委員会委員長として活動させていただいております。昨年のアンケート調査の際には、多くの会員の皆様の御協力をいただきました。このアンケート結果を基盤に、人材育成委員会としての提言をまとめる予定になっております。今後、日本病理学会のさらなる発展のためには、若手病理医のリクルートや、その育成がきわめて重要かつ急務です。特に女性病理医数が増加している現在、育児支援はもとより、女性病理医・病理研究者が男性病理医・病理研究者と対等のキャリアアップが出来るような育成・支援システムを確立・充実させていくことがますます重要になると考えられます。この課題の達成に向けて、私は全力で努力したいと考えております。皆様の御支援を賜われればありがたく、よろしくお願い申し上げます。

安井 弥

(広島大学大学院分子病理学)

診断病理と実験病理は表裏一体、どちらも欠くことのできない「病理学」の推進力です。医療としての病理学は、先進医療や社会的要求に答えるべく、様々な努力がなされています。一方、基礎医学を支えるMD研究者の不足は、臨床研修義務化以降に特に深刻であり、毎年の卒業生の0.3%(全国でわずか25名程度)となっています。しかし、病理へ進む者は未だ少ないものの1%近くもいます。これは、全国から診断系以外の病理学講座が消滅する危機ではなく、逆に大きなチャンスと言えます。さらに私たちには、医科学研究に必要な物事を二次元ではなく鳥瞰的に捉える目があり、医療・社会のニーズに即したシーズを見いだすことも得意です。今こそ、重きを診断に置く者も実験に置く者も一致団結して、病理学の使命と立ち位置を認識し、重要性と魅力を広くアピールする時と考えます。病理学会がその場となるように尽力いたす所存です。ご支援をお願い申し上げます。

新役員当選者名簿

(1) 選出区分1 地方区選出理事：7名

1-1 北海道 地区 佐藤 昇 志(札幌医科大学)

1-2 東北 地区 本山 悌 一(山形大学)

- 1-3 関東地区 加藤良平 (山梨大学)
 1-4 中部地区 白石泰三 (三重大学)
 1-5 近畿地区 寺田信行 (兵庫医科大学)
 1-6 中国四国地区 吉野正 (岡山大学)
 1-7 九州沖縄地区 橋本洋 (産業医科大学)

(2) 選出区分3

口腔病理部会長兼全国区選出理事：1名

山口 朗 (東京医科歯科大学)

(3) 選出区分4 監事：2名

真鍋俊明 (京都大学)

佐野壽昭 (徳島大学)

所信表明一覧 (II)

(1) 地方区選出理事：3名

北海道地区

佐藤昇志

(札幌医科大学医学部第1病理)

日本病理学会理事候補のひとりとして以下のような所信を表明させていただきます。私は過去2年間北海道地区理事として役割を担わせて頂きました。引き続きその任務を全う出来れば幸いです。

我が国の医学、医療は様々な課題を抱えており、病理学、病理学会の役割も時代に合わせた、かつ将来の医学、医療により深く貢献する体制をつくるべくより努力する必要に迫られているところであります。具体的には、1) 病理学を担う若い人材育成、2) 各地域における病理医のネットワーク形成を通じた病理学の振興と病理学会のより一層の活性化、そして3) 病理学の社会への積極的貢献、を主な柱としたいと存じます。これらは病理学会でもいづれも重要な柱として様々な取り組みが行われていますが、理事としてより積極的に貢献出来れば幸いです。

会員諸氏のご協力を得て病理学の発展に尽力させていただきます。

近畿地区

寺田信行

(兵庫医科大学病理学機能病理部門)

私は、病理学が今後も発展するためには、病理学が人体病理及び実験病理研究を包含した、診断病理を頂点とする裾野の広い学問である事が重要であると考えています。この病理学の包含する分野の多様性により、種々の才能を持った人材を吸収し、更に、これ等の分野間での人材の流動が可能な体制を構築する事により、病理学は今後も持続的な発展を遂げる事ができると信じております。私は、この様な考えを基本とし、病理学の発展と病理学に携わって

いる方々の地位の向上の為に努力するつもりであります。今回私は、近畿支部選出の理事に立候補いたしました。支部の運営に関しては、学術集会、講習会等の学術活動により、会員に病理診断能力の向上の機会を提供するとともに、各種広報活動により一般の方々の病理医の役割に対する理解を深めたいと考えております。更に支部会員の御意見・要望が日本病理学会の運営に反映されるよう努力したいと考えております。

中国四国地区

吉野正

(岡山大学病理学腫瘍/第二)

日本病理学会中国四国支部には学術委員会、業務委員会、広報委員会、庶務委員会があり、それぞれの役割を果たしてきた結果円滑な運営がなされてきました。今までの活動の中では、学術集会スライドカンファレンスにおいてバーチャルスライドの導入、病理夏の学校の創始、細胞診関係の講演会、各種病理技術の普及活動、病理業務全般にわたる各種調査、ホームページの充実、過去のスライドカンファレンス提出症例のアーカイブ化といったものが特筆されます。これらの成果のなかには先駆的なものがいろいろとあります。これまでの運営方針を堅持し、会員の積極的なご協力をいただき、会員の総意を集約する形で発展的な運営をしたいと存じます。この趣旨にご賛同くださり、ご支援賜るようお願いいたします。

(2) 口腔病理部会長兼全国区選出理事

山口 朗

(東京医科歯科大学口腔病理学部門)

口腔病理部会担当理事を一期担当させていただきました。この間に、病理学を基盤として「口腔から全身を視る」「全身から口腔を視る」ことができる口腔病理医を育成することを目指して活動してきました。特に、口腔病理専門医制度運営委員会の委員長として同制度の改善に取り組んできましたので、今後、病理解剖を含む病理診断を通して口腔領域疾患の病理診断に関わる優れた口腔病理医を育成する環境を整えたいと考えております。そして、日本病理学会を通して口腔病理医による診断業務の社会的認知を高めるように努力いたします。また、口腔領域疾患の分子病理学的研究を推進することにより、口腔疾患の新たな疾患概念を創成することができる口腔病理医を育成することも目指します。さらに、病理医の方にも「全身から口腔を視る」ことの重要性をさらに深く理解していただくことにより、日本病理学会の発展に寄与したいと考えております。

2. 病理専門医資格の更新について

日本病理学会病理専門医資格更新の本年度該当者には、

学会事務局より必要書類が送付されます。本年度該当者は、第2回（1980年）認定登録者ならびに第2回（1984年）、第7回（1989年）、第12回（1994年）、第17回（1999年）、第22回（2004年）試験合格者になります。

また、上記以外で更新の手続きが遅れていた方で、本年度に更新申請を希望される方は、事務局までご連絡下さい。必要書類を送付いたします。

資格更新希望者は、平成21年10月31日までに所定の手続きをおとり下さい。

3. 口腔病理専門医資格の更新について

日本病理学会口腔病理専門医資格更新の本年度該当者は、学会事務局より必要書類が送付されます。本年度該当者は、第2回（1990年）認定登録者ならびに第2回（1994年）、第7回（1999年）、第12回（2004年）試験合格者になります。

また、上記以外で更新の手続きが遅れていた方で、本年度に更新申請を希望される方は、事務局までご連絡下さい。必要書類を送付いたします。

資格更新希望者は、平成21年10月31日までに所定の手続きをおとり下さい。

4. Pathology International 編集長 (editor) の募集について

平成21年8月
社団法人 日本病理学会
理事長 長村 義之

Pathology International 現編集長の任期満了にともない、平成22年以降の編集長を下記の要領により募集いたします。応募、または推薦の書面を病理学会事務局までお送り下さい。

応募要領

1. 応募は自薦、他薦を問わないこと。
2. 応募者は、学術評議員である日本病理学会会員であること。
3. 応募者が自薦の場合は、氏名、所属機関、応募の要旨を、また他薦の場合は、推薦する候補者名を記載した書面（書式は自由）を提出すること。
4. 任期は、平成22年1月1日より4年とすること。再任可であるが2期目以降は任期2年とすること。
5. 締め切りは、平成21年9月30日（消印有効）とすること。

5. 第27回病理専門医試験について

本年度の病理専門医試験は、7月25日（土）、7月26日

（日）に京都府立医科大学にて実施されました。

80名が受験して、64名が合格しました（合格率80%）。合格者氏名ならびに病理専門医登録番号は、次のとおりです（登録年月日：平成21年7月29日）。

平成21年度病理専門医合格者氏名

認定番号	姓 名	認定番号	姓 名
2744	田中 弘之	2776	田中 優子
2745	藤田 久美	2777	谷川 健
2746	伏見聡一郎	2778	村上 善子
2747	佐藤 朋子	2779	大畠 尚子
2748	濱崎 慎	2780	御子神哲也
2749	山田 壮亮	2781	伊藤 僚子
2750	大森 泰文	2782	外岡 暁子
2751	星本 和種	2783	高橋 葉子
2752	村垣 泰光	2784	森川 鉄平
2753	木村 太一	2785	小林実喜子
2754	藤田 茂樹	2786	瀧山 晃弘
2755	木澤麻由紀	2787	丹藤 創
2756	飛田 陽	2788	宮永 朋実
2757	牧野 睦月	2789	豊住 康夫
2758	菰原 義弘	2790	大越 忠和
2759	米田玄一郎	2791	米田亜樹子
2760	辻 隆裕	2792	山田 拓司
2761	豊田 亮彦	2793	坂元 一葉
2762	小池 裕人	2794	本間 尚子
2763	曾我 美子	2795	飯塚 徳重
2764	石川 典由	2796	大上 直秀
2765	松影 昭一	2797	市原 真
2766	工藤 和洋	2798	関 れいし
2767	梶浦 大	2799	河合 繁夫
2768	内橋 和芳	2800	永野 輝明
2769	山本 鉄郎	2801	中井真由美
2770	池村 雅子	2802	田中 健大
2771	乳井 美樹	2803	林 伸一
2772	武田 広子	2804	伊藤 崇
2773	近藤 譲	2805	鹿取 正道
2774	飯塚 利彦	2806	櫛谷 桂
2775	小野寺正征	2807	桑江 優子

また、病理専門医試験実施委員会の委員構成は以下のとおりです。

第27回（平成21年度）（11名）

野々村昭孝（委員長）、廣川満良、笠井孝彦、小橋陽一郎、小西英一、九嶋亮治、三上芳喜、中峯寛和、島田啓司、新宅雅幸、弓場吉哲

6. 第17回口腔病理専門医試験について

本年度の口腔病理専門医試験は、第27回病理専門医試験と同日、同会場で行われました。

3名が受験して、2名が合格しました（合格率66.7%）。合格者氏名ならびに口腔病理専門医登録番号は、次のとおりです（登録年月日：平成21年7月28日）。

平成21年度口腔病理専門医合格者氏名

口腔認定番号	氏名	口腔認定番号	氏名
142	矢田 直美	143	佐藤 淳

また、口腔病理専門医試験実施委員会の委員構成は以下のとおりです。

第17回（平成21年度）（3名）

豊澤 悟（委員長）、長塚 仁、和唐雅博

お知らせ

1. 平成21年度「風戸賞」および「風戸研究奨励金」の公募について

申込み締切り：平成21年10月30日および平成21年12月18日

連絡先：（財）風戸研究奨励会 事務局
〒196-8558 昭島市武蔵野3-1-2
日本電子（株）内

TEL：042-542-2106 FAX：042-546-9732

E-mail：kazato@jeol.co.jp

お詫び（訂正）

会報258号（平成21年7月刊）に掲載いたしました総会時研究推進委員会報告におきまして、本年の技術講習会のテーマに誤りがありましたので、訂正いたします。

テーマ 正：「病理に役立つ細胞マーキング」

誤：「炎症と免疫・癌」

ご迷惑をおかけいたしましたことをお詫びいたします。

日本病理学会認定施設の認定申請（新規）について

第32回（平成21年）の認定審査のための申請を下記の通り受け付けますので、ご通知申し上げます。

1. 申請受付期間 平成21年10月1日～平成21年10月31日
2. 申請に必要な書類
 - 1) 日本病理学会認定施設認定申請書 1通
 - 2) 認定施設認定申請書資料 1通
3. 申請に必要な書類の請求・送付先
〒113-0033 東京都文京区本郷2-40-9 ニュー赤門ビル4F
社団法人日本病理学会事務局
TEL: 03-5684-6886 FAX: 03-5684-6936
E-mail: jsp-admin@umin.ac.jp

日本病理学会登録施設確認申請（新規）について

第32回（平成21年）の登録施設確認を行なうにあたり、下記により確認申請を受け付けますのでご通知申し上げます。

1. 申請受付期間 平成21年10月1日～平成21年10月31日
2. 申請に必要な書類
 - 1) 日本病理学会登録施設確認申請書 1通
 - 2) 日本病理学会登録施設被登録承諾書 1通
 - 3) 登録施設確認申請書資料 1通

注意 1) は既に研修施設として認定されている大学の病理学講座・病理部等より申請して下さい。

2) はこれから登録を受けようとする病院より提出して下さい。

3) はこれから登録を受けようとする病院の専任又は非専任の病理医が記入することが望まれます。
3. 申請に必要な書類の請求・送付先
〒113-0033 東京都文京区本郷2-40-9 ニュー赤門ビル4F
社団法人日本病理学会事務局
TEL: 03-5684-6886 FAX: 03-5684-6936
E-mail: jsp-admin@umin.ac.jp